

SHOW HEYシネマルーム

★★★★

ターミネーター3

配給/東宝東和

2003 (平成15) 年7月27日鑑賞

Data

監督: ジョナサン・モストウ

出演: アーノルド・シュワルツェネ

ッガー/ニック・スタール/

クレア・デーンズ/クリスタ

ナ・ローケン

👁️👁️ みどころ

アーノルド・シュワルツェネッガーの当たり役のターミネーターが12年ぶりに戻ってきた。56歳のシュワちゃんは相変わらずの「タフマン」ぶりで究極の殺人マシンT-Xと対決する。しかしT-Xの方がスピード・パワー・知性において性能が上だからシュワちゃんの苦労は大きい。複雑なストーリーは横において、肉弾アクションとカーチェイスを楽しめばいい。しかし、マナーの悪い若いヤツらと一緒に観るのはかなわんなー。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<ターミネーター1、ターミネーター2、ターミネーター3の複雑かつ難解なストーリー>

アーノルド・シュワルツェネッガー主演のターミネーター1は1984年、そして大ヒットを記録したターミネーター2は1991年の作品だから、2003年の本作ターミネーター3は1作目から20年近く経たことになる。

もちろん『T1』製作の時に、パートII、パートIIIを予定していたわけではないから、その企画・脚本はその都度新しくつくらなければならないが、その作業はとてつもなく大変だということが分かる。『T1』の基本ストーリーは、近未来における人類の存亡をかけたマシン軍との戦いだった。そして、人類が開発した軍事コンピューター・システムである「スカイネット」が人類への「反乱」をおこし、全世界の核を爆発させることにより、30億の人間を滅ぼしてしまう。その「審判の日」が、1997年8月29日という設定だ。

<各種のターミネーター>

アーノルド・シュワルツェネッガー扮するターミネーターは、人類抵抗軍の指導者を抹殺するためにスカイネットが送り込んだ、サイバーダイン101型超合金の骨格を生体細胞で包み込んだ、人間の形をした機械（サイボーグ）だ。

『T1』では、このターミネーターは、人類抵抗軍の指導者暗殺のために活動した。しかし『T2』ではシュワルツェネッガー扮するターミネーター（T-800）は、人類の味方となった。そして彼が別に送りこまれたターミネーターのT-1000との壮絶な戦いを繰り広げたことが観客に受けて、大ヒットした。

本作『T3』では、シュワルツェネッガーのターミネーターはT-1000に進化した。しかし2032年、人類抵抗軍のリーダー暗殺のために送り込まれた別のターミネーターは、女性ながらスピード、パワー、知能等において、T-1000をはるかに上回る性能をもった究極の戦闘マシンT-Xだった。シュワルツェネッガーは、このT-Xによる人類抵抗軍のリーダー暗殺の追及と戦い、人類を守るため、T-Xとの死闘をくり広げるといのが、『T3』の基本ストーリーだ。

<前宣伝と本作の観客の期待>

もっとも、以上のストーリー説明はほんの1部だけ。

①人間とマシンの関係、②コンピューター・システムとしての「スカイネット」の意義、③マシンの性能やその意識等を正確に理解しながら、この映画のストーリーを追っていかうとすれば、かなり大変だ。しかし、この映画の観客の大多数は多分、そんな複雑なストーリーを理解することを求めるのではなく、シュワちゃんの肉体をぶつけたアクションとサイボーグ人間同士の格闘の面白さ、そして本作特有のすさまじいカーチェイスなど、アクション娯楽映画として楽しむことを期待しているはずだ。

『T3』は前宣伝もすごい。マスコミを総動員して一気に観客動員をかけようとしているし、シュワちゃんは日本も訪問した。それに輪をかけて、まことしやかにマスコミで流されているニュースは、アーノルド・シュワルツェネッガーが共和党からカリフォルニア州知事に立候補するかもしれないといううわさ。多分「ガセネタ」だと思うが、何ともタイムリーなうまい前宣伝だ。

<主役はT-1000のシュワちゃんから人間へ>

この『T3』ではシュワちゃんはT-1000のマシンとして活躍するが、それはあくまで、人類抵抗軍のリーダーである主人公ジョン・コナー（ニック・スタール）を守るためだ。そしてこのジョン・コナーと不思議な縁で結びつく女性がケイト・ブリュースター（クリア・デーンズ）。しかし、この結びつきを説明し、理解するのはこれまた面倒。

とにかくこの2人の人間が、T-Xの追及から逃れ、T-1000がこれを守るというのがストーリーの基本。だから実質的な主人公はシュワちゃんではなく、ジョン・コナー

とケイト・ブリュースターに移っているといっても過言ではない。

1947年生まれのスワちゃん今年56歳。そのスワちゃんは、更に肉体改造をし、すばらしい肉体美で肉弾戦を闘い、さらにはオールヌードまで見せる。アーノルド・シュワルツェネッガーのファンはただそれを楽しめばいいわけだ。

<美人のT-Xはセリフなし>

究極な殺人マシン、T-Xに扮する美女は、クリスタナ・ローケン。髪を後ろにまとめ、赤いレザーの衣裳で登場し、人間を追いかけ、スワちゃんと格闘しさらにカーチェイスを展開する。それがほとんどの役割だから、怖い顔ばかりを見せるしセリフも全くなし。役者としてはあまり乗り気になるような役柄とはいえないだろう。

救われるのは、T-Xを女性ロボットに設定したことの効用。だから何にでも触れた物に変身可能という能力をうまくいかせることができる。すなわち、人間の女性に変身した時、わずかに見える男を誘う仕草や表情だ。

クリスタナ・ローケンは1979年生まれだから、まだ24歳の若さ。本作でのT-Xのような、全編を通して①怖い目をし、②無表情を通し、③機械的動きに徹するという役柄ではなく、もっとその美しさや優雅さを見せつける役を演じてもらいたいと思う。

<『マトリックス』の格闘シーンの対比>

アーノルド・シュワルツェネッガーの演ずる格闘シーンは、直接肉体をぶつけ合い、身体を傷つけ合うものが多い。もちろん周りのものもいっばい破壊するが、同時に自分の肉体も傷つき、相手にもそれ相応の損傷を負わせる。その迫力が何といってもスワちゃんの魅力だ。

しかし『マトリックス』の格闘シーンは、そうではない。そこではワイヤーをたくみに使い地上を舞いながらの攻防戦とカンフー的アクションが売りモノだ。そのどちらがよいか。私は当然前者すなわち肉弾戦だ。そして圧倒的に強いスワちゃんもいいが、性能が劣っていることを自覚しながら、「ジョン・コナーを守る」という任務のために、何度もT-Xに立ち向かっていくスワちゃんにも拍手を送りたい。それにしても企画・脚本の段階で、どんな映画でもつくれるものだと感心・・・。

<大勢の若者の観客とそのマナーの悪さ>

前宣伝の効果もあり、この『T3』の人気は上々。ほぼ90%の入りが、観客のほとんどは若者。そしてざっと見たところ、アベックが7割で、若い男の子同士が3割。男の子同士の観客が多いというのが、『T3』の観客の特徴だろう。

例によって私は1人。そんな若い観客の中に1人、白髪のオッサンが座っていると、違和感を持つのは若者の方かもしれないが、「今ドキの若い奴」のマナーの悪さにはほとんど

あきれる。

第1は、とにかくじっと座っていないこと。足を動かし、腕を動かし、お尻をズラし、ペットボトルでお茶を飲み、とにかく落ち着かない。「2時間位じっと観ていたらどうやねん！」

第2は、体格のいい若い奴が前の席に座ると、後ろの席からはスクリーンの字幕が見えないこと。『T3』では字幕がスクリーンの下に横書きで出るからなおさらだ。「お前、頭をもうちょっと下げや！」

第3は、さすがに本編が始まれば止まるものの、予告編の間のアベックのおしゃべり。特に「おしゃべり女」の隣に座ると大変。女がペラペラとしゃべり、男は相槌ばかりのケースが多い。「お前ら、しばらく黙っとけ！」

<最悪の席>

この映画でたまたま空いていた1つの席に座った私は、三重苦を受け悲惨だった。

第1は前の席。座った時は前の席が1つ空いていたので、ラッキーと思っていたら、予告編の終わり頃、えらい座高の高いヤツが座った。後ろに気を遣う素振りなど微塵もなし。上映中一貫してその頭の高さは抜きんでいた！

第2は左の席の男。こいつがとにかくじっとしていない。だから時々腕が当たってくる。気分が悪いのでこちらも少し動くし相手も更に強く反応。「このヤロー」と思いながらも、これ以上かかわってケンカになったらコワイので、仕方なくこちらがおとなしく・・・。「シユン」。

第3は右側のアベック。私の右隣に女の子が座ったので右側のひじあてには多少余裕があったが、スカートをはいたその女の子は、当初足を組んでキレイな足首を見せていたものの、何と途中から足を折って両手で抱えてスクリーンを観る始末。

映画が終わって早い目に右側から出て行こうとしたら、思わずスカートの中がのぞけそうに・・・。「大切なものはちゃんとしまっておけ！」

若いヤツらと一緒に映画を観るのは本当に大変だ。

2003（平成15）年7月28日記